

東京清陵会だより

母校への熱き想いを

同窓の紐帯を強めよう

会長 林 尚孝(52回)

日本中を興奮と熱気の渦に包んだサッカーワールドカップは、日韓共催という初めての試みの中で、数々の番狂わせを見せながら、ブラジルの優勝で閉幕した。しかし一方では、二世紀の海図なき航海が続いている。イスラエルとパレスチナ、インドとパキスタンなどの泥沼的紛争に加え、最近ではアフガニスタンでの閣僚暗殺、韓国と北朝鮮の警備艇同士の銃撃戦なども伝えられ、イラクへの米国の攻撃なども公然と語られている。エンロンその他の粉飾決算による疑惑から、米国経済すら暗雲が立ちこめている。

●母校の明るい話題

幸いなことに、母校諏訪清陵高校には明るい話題が多い。この春スーパーサイエンスハイスクール(S・SH)に選ばれた。ご承知のように公立高校二〇校、私立高校三校、国立高校三校という狭き門を通り、年間二五〇万円の特別予算を三年間交付される。六月に刊行された「日

本の名門高校ベスト一〇〇」(週刊朝日)の広告企画)にも名前を連ねた。長野県からは五校が入っているが、数えてみると全国で一〇〇校には間違いなく、山梨県からは甲府一高がただ一校選ばれているに過ぎない。また、野球部は創部以来初めて長野県大会優勝、北信越大会準優勝という快挙をなしとげ、甲子園への夢をひろげた。

●東京清陵会人名録発行

目を東京清陵会に向けていることにする。二年前の就任挨拶で、会長として三つの目標を掲げた。それらは、人名録の発行、ホームページの開設、母校との交流である。

第一の目標は、この三月に「東京清陵会人名録二〇〇二」が刊行されることにより果たされた。読む名簿により同窓生の紐帯強化をめざし、一般の名簿項目に加え、生年月日やEメールアドレス、縁故欄、三〇〇字以内のコメント欄を設けている。B五判四四頁には、三七五

第13号
編集・発行人 東京清陵会
(諏訪清陵高等学校同窓会) 東京支部
会長 林尚孝
事務局 〒120-0005
足立区綾瀬 2-31-7
(株)小野包装 気付
TEL. 03-5680-7633
FAX. 03-5680-7665
E-mail: tseyryo@papiacargo.co.jp

〇名の会員と、物故会員約一一〇〇名が収載されている。四一%の会員が原稿を寄せ、人名録作成に参画された。また、大勢の会員から広告が寄せられ、頒価を低く抑えることができた。制作委員諸氏は文字通り手弁当で、一年で二〇回以上会合を重ねた。にもかかわらず、現在一〇〇〇部強の購入にとどまっております。残念なことに赤字状態にある。人名録を通読すると清陵の歴史や諏訪人の特質が浮かび上がってくる。まだ人名録を手に入っていない方は、是非購入してお目通しいただきたい。

●在校生・同窓生の交流会

第三の目標についての模索は、昨年九月から始まった。在校生との交流を末永く続け、伝統について考えて貰いたいという願いからである。"伝統"を考えると一口にいつても大変難しい。卒業式での校歌の歌声が何とも寂しい。校歌をテーマに伝統を考えようと学友会との会合を重ね、二月一日には卒業生二〇名、生徒十数名による集まりをもった。

学友会は校歌を歌うキャンペーンを行なったが、それを妨害する生徒がいる。校歌が学友会の手によって作られたという歴史を知らず、学校当局

による押しつけと勘違いしているらしい。憂慮していたところ、今年の当番学年六九回生は、「東京清陵会だより」のテーマを「清陵の伝統とその継承」とし、在校生との交流を積極的に進めようとした。在校生側も卒業生との交流を望んでいた。何と清陵祭のイベントの一つとして「在校生・同窓生交流会二〇〇二」が企画され、七月六日に全校生徒参加の下で一七分科会が成功裏に開かれた。旅費・日当もない交流会に数十名の東京清陵会会員が参加された。母校への熱き想いを本号特集記事から読みとっていただきたい。交流会その他に関係された各位に深く感謝したい。今後も色々な形で在校生との交流を図るので、会員各位のご協力をお願いしたい。

社会の余裕のなさの反映なのか、残念ながら全体としては同窓会への参画が低下しつつある。会費納入も低迷し、別項のように数年前まで一六〇〇万円あった繰越金が一〇〇〇万円を切るうとしている。同窓会活動継続のために、会員各位のご協力を切にお願いする次第である。



「在校生・同窓生交流会 2002」第2分科会にて。後列右から小平祐禎問(42回)、林尚孝会長(52回)、矢澤博69回幹事、前列は在校生

2002年度 東京清陵会定期総会案内

日時 2002年10月18日(金) 午後6時~8時30分 受付午後5時開始

場所 アルカディア市ヶ谷(私学会館) 3階「富士の間」

東京都千代田区九段北4-2-25 電話 03-3261-9921

市ヶ谷駅(JR、地下鉄有楽町線、南北線、都営新宿線) 下車2分

- 議題
- (1) 2001年度会務報告、決算報告
 - (2) 2002年度事業計画、予算案
 - (3) 『東京清陵会人名録』刊行
 - (4) 会費値上げについて
 - (5) その他

懇親会 会費 8000円(在学中の学生は半額)
当番幹事: 69回生 次期当番幹事: 70回生
サブ幹事: 79回生、89回生
お手数ですが、出席、欠席、いずれの場合でも同封の返信用はがきにご記入の上、9月30日必着にてご返送ください。



日に新たなる清陵へ

清陵のいまを体験する

1

校風、伝統は、日常生活の中で育まれる。同窓生二人が今の清陵を一日体験した。

清陵高校 授業参加の記
二〇二二年八月二十五日(火曜日)
高林良治 (52回)

登校

五時半、姉の家で目覚める。今朝も梅雨空ですつきりしない。
八時に学校で教頭の堀金先生と会うことになっている。上諏訪駅に何時頃行けば「汽車通学」の清陵生に会える



上諏訪駅前通り 雨のなかを登校

のかと時刻表を見る。七時台から八時にかけて、上り下りともに五、六本あるので、七時半頃に行ってみる。敗戦後の五十余年前、私が岡谷から諏中に通っていた頃には、この時刻、汽車は一本位しかなかったように思う。

背広姿の大人たちに混じって、高校生らしき男女が大勢、改札口を出てくる。服装はまちまちで、男は背中にデイベック、女は長い持ち手のトートバッグである。その昔は、二本の白線の入った帽子にズックの肩掛けカバン、腰には手拭いをさげ朴菌の下駄をはいていた。これなら一目瞭然なのだが、ともかく、高校生らしき十数人の後に歩いて行く。



通学路になっている清水町の裏道

母校はまもなく創立一一〇年を迎える。この間、諏訪のみならず国内外に活躍する人材を輩出し、それらの人の揺籃に「自反而縮雖千萬人吾往矣」「自治」「勤勉努力」「質実剛健」の校風が強い影響を与えてきた。この伝統は今日どのような意味があるのだろうか。
本号の特集では、同窓生・在校生との交流の中から、新しい時代につながる諏中・清陵精神(スピリット)の継承と発展の糸口を見い出したい。

あいさつ

駅前の本通りを清陵の方へ。この通りには、博信堂・笠原書店・日新堂などの本屋さんがあったのだが、今は三軒ともない。道幅は昔と同じなのに、車が絶え間なく走り過ぎていく。生徒たちは、その本通りの歩道を左右に分かれて歩いている。昔のように、ひろがっては歩けない。

女関で持参した運動靴にはきかえ、校長室で、林尚孝会長、吉川仁さんと、堀金先生が小林優也君(二年一部)と柴田淳平君(二年五部)を紹介してください。小林君は理系で次期学友会長だという。柴田君は文系でホームルーム長である。文系、理系に分けられるようになったのは、いつ頃からのことか。私は柴田君の授業に同行することになる。教科書などすでに用意してくれている。二人とも、じつにいきいきとして、さわやかである。嬉しくなる。

角間橋を渡り、「真澄」醸造元の前を過ぎた頃、その生徒たちが突然消えてしまう。ハテナと思っていたら、学校に通じる路地に入ったらしい。そういえば、これは、前からあった裏道だ。それをたどると、以前、校門のあった場所に横長の丸石があり、「諏訪清陵高等学校」と彫られている。ダムのよいうなコンクリート壁を見上げながら急勾配の右の道を上ると台地に出る。本館校舎があり、先輩細川宗英さんの彫刻「鐸」が来校者を迎えてくれる。

柴田君の時間割によると、八時半から三時半までの間に、五つの授業、その間にホームルーム二〇分と昼休み四〇分がはさまれて、最後に清掃二〇分となっている。授業は各六〇分。ふつうは六五分だが、清陵祭の準備の都合上、五分短縮とのこと。

午前の授業

まずは、生物の授業、理科一番教室。男生徒二名、女生徒二六名。机は三列で中央に三名、左右に二名ずつ座れるように配置されている。後ろからみると、男女いずれか判然としない生徒が二、三割はいる。それほど、髪型や

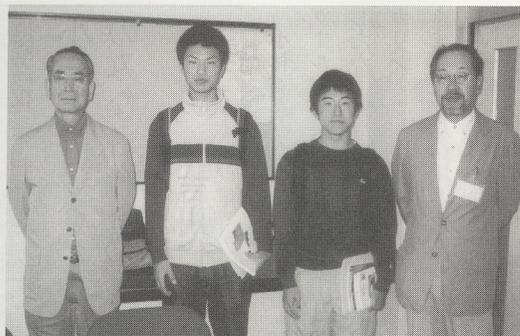
シャツの柄や色などが似通っている。窓にはちゃんとガラスが入っていて、梅雨寒ではあるが、冷えるというほどではない。
私がいた頃の校舎(初代)は築三〇年から五〇年のオンボロの木造で、教室の窓ガラスは破れ、冬は寒かった。暖房はダルマストーブ一つで、燃やす薪が少なく、ときおり椅子や机が密殺されることもあった。しかし、ウシマサ(牛山正雄先生)の地学教室、フラスコの林立した化学教室、物理の階段教室など、オンボロ校舎でもそれなりの風格と活気があった。
宮原先生が入ってくる。誰かが「起立、礼」と声をかける。先生は精神な風貌である。黒板に端正な字で次々と化学方程式を書いていく。
「いいかえ、忘れずにここを覚えておいてもらいてえ、何か質問はあるかね。それでは先へいくぞ。嫌気呼吸について」。質の高い内容をスワ言葉でというのが嬉しい。ときどき生徒に質問する。小さな声で答えると、「自信をもって言え、自信をもって」と励ます。眠っている生徒がいるようでも、「あと一つだけだから、ちゃんと目をあける」と叱咤する。「これで終わりだ」という先生の声にに応じて、「起立、

「礼」となる。「ありがとうござい
ました」という大勢の声。

一〇分の移動時間をはさんで、次は
国語の六番教室へ。すぐに着く。旧校
舎時代は総数三二九と言われた階段を
昇ったり降りたり、高い所にある校舎
から低い校舎へと、吹きさらしの長い
渡り廊下を、はだして踏みならしなが
ら移動したものである。

小高先生が入ってくる。若い女の先
生。澁刺としてオーラがある。出席者
は男生徒六名、女生徒一四名。一同起
立して礼をする。先生が「おはようご
ざいます」と挨拶される。そして黒板
に「五月雨」と書き、「梅雨」と書き、
そのつながりを説明される。ついで
「薔薇は薔薇の悲しみのために花とな
り青き枝葉のかけに悩める」と書き、
若山牧水の歌です、みなさんも歌集を
読んでみてください、と言われる。

このあと、いきなりテストである。
問題集からの竹西寛子の文章をもとに



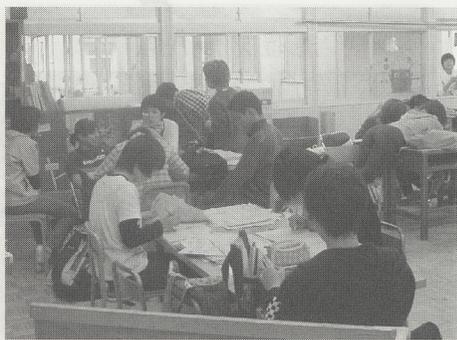
左から高林さん、柴田君、小林君、吉川さん (69回)

した設問である。六問を三〇分。私も
やってみる。いやはや難しい。時間が
迫ってくると頭がかすんでくる。コレ
さ(牛山之雄先生)の「ここを過ぎて
悲しみの市、友はみな僕からはなれて」
と朗読された声が懐かしい。

テストが終わると、自己採点である。
小高先生は生徒に答えさせながら、正
解を黒板に書いていく。教室を出たと
ころで柴田君に「テスト難しかったね」
と聞くと、「そうでしたな」と落ち着
いたものである。

このあとは、ホームルームで二〇分。
通例は一〇分らしい。二年五部のホー
ムルームは社会六番教室。新井先生が
担当。トレバンの姿のしつかりした先生。
男生徒二名、女生徒一九名。先日み
たという同和教育のビデオの感想文を
提出、ついで生徒から清陵祭へのアピ
ールがある。清陵祭参加の合唱練習が
始まる。五十余年前、ホームルーム制
度ははじめて導入されたときは委員に
選ばれたが、どう運営すればよいのか
わからなくて悩んだことを思い出す。

第三時限は英作文。男生徒三名、
女生徒一四名。島山先生は温厚なお人
柄だ。最初に、学習する章のCDを二
回繰り返しきかせる。そして、「わか
りにくいところにコメントをくわえ
るので、メモをとってください」と言
われて、ゆっくりと説明される。一区
切りついたところで、練習問題を各人
にやらせる。最後に英作文の宿題を課
して終わり。かつて、英語の時間に、
古びた講堂の古びたピアノの前で、兩
角克夫先生からOld Black Joeの歌を教



清陵祭準備で忙しい学友会室

わったときの情景がよみがえる。
午前の授業は一二時二〇分に終わ
り、四〇分間の昼食時間となる。

柴田君はお母さんのつくってくれた
弁当を食べるとのこと。当方は、生徒
昇降口の廊下で売っていたサンドイッ
チを買って応接室に戻る。

昔、遠距離通学の級友が二時限頃に
弁当を食べ歩いて、「山梨胃拡張」と
呼ばれていたことを吉川さんに話した
ら、「先ほども二時限後に食べていた
生徒がいましたよ。半分お昼用に残し
ていました」と言われたのは驚いた。

午後の授業

午後はまず現代文で、西条先生。色
浅黒く、泰然とされている。男生徒一
三名、女生徒二六名。試験の答案が返
される。「答案を確認してみてくださいや、
異議申し立てある人いるかや」と生徒
に聞く。異議なしのようである。しか
し、異議とは何ぞやと考えていると、
吉川さんが「僕らの頃には、先生に異
議をふっかけるのがいた」と言われる。

テキストは山崎正和の「劇的な日
本人」という文章である。著者が引用
している古文を文脈の中でどう読み解
くかという作業を先生は続ける。途中
で何人かにスバズバと質問するが、会
心の答えが出ない。昼食後のせいかな、
居眠りする生徒が若干いる。

次は数学。ようやく最後の授業であ
る。藤森先生が入ってくる。すつきり
した若い男の先生である。生徒一同起
立して「お願いします」と言う。男生
徒二名、女生徒一七名。先生が私を
紹介してください。

今日は、三角関数の積と和の公式の
勉強。テキストは色刷りで紙質はよい。
その昔はザラ紙で、自分で製本した記
憶がある。先生は黒板いっぽいに、
「ただ、cosだ」と書いて公式を説明
する。生徒は真剣に聞き入る。茶髪も
いるが、いままで気にならなかったの
はなぜか。

先生が突然、「先輩は公式を覚える
のに、どうされましたか」と聞いてく
る。どうされましたかと言われても、
いま黒板いっぽいに書かれている公式
を教わったという確かな記憶がない。
「いえ、特に何もありませんでした」と
答えると、先生はニコッと笑って、何
か歌のような口調を二、三回繰り返さ
れる。まいった。ユレイイ(浜稲雄
先生)の顔が浮かぶ。あの数学の時間
は、先生の思索が宇宙空間を自由に
駆けめぐっているようで、詩の時間では
なかったらうか。

最後に練習問題を解かせて授業は終
わる。時に三時一〇分。柴田君はこれ

から「バレー部の打合せに出ます」と
言う。お借りした教科書一式をお返し
する。そして、お元気でと言って別れ
る。ありがとう!

頭だけがポツと浮いて体が沈んだよ
うな気分に応接室に戻る。すぐに吉川
さんも帰ってくる。「いやあ、疲れた、
発熱しそう。今の子どもたちはエライ」
という。安心する。

帰るまえにトイレに寄る。便器のま
えの壁に、第一校歌を大書した紙が横
一面にはられ、漢字にはルビがふって
ある。そういえば、校長室には、「自
反而縮雖千萬人吾往矣」の額が高く掲
げられてあった。

外に出ると、登校の時に霧で見えな
かった周りの山なみが姿を現してい
る。この山なみに囲まれた空間に、校
舎や生徒たちの服装は変わってはきた
が、熱心な先生たちのもと、七七六名
の清陵生がひたすらに学び活動してい
る。それは、大きな励みであり喜び
である。



西条先生の授業

清陵高校 一年一部 小林君およびクラスのみなさんへ

吉川仁 (69回)

小林くん、合唱コンクール、結果はどうでしたか、賞品のバラ炭カレントウ、ゲットできましたか。ホームルームの混声合唱の練習、いいものです。昔はオンチコン前は、男ばかりのダミ声雑唱で、ひどかったものです。

さて、六月二十五日の一日体験は、大変お世話になりました。とても感謝しています。一口

で言えば、みんながとても頑張っていると感心しました。全力で授業や清陵祭の準備に取り組んでいる様子が見えました。

個人的には足と頭がとても疲れました。足の疲れは、校舎のせいでしょう。新しい校舎は、明るくきれいですが、四階建ての階段昇降は歳にはきついです。二代目校舎は木造一階建て、ギシギシクッションの階段で、人によっては窓から出入りするのもしました。校舎といえば、斜面のコモンスペース、気のあった友だちと話すのはとても明るく楽しそうです。我々の頃は、薄暗いホールや階段室などに変なスペース



音楽の授業中

があり、屋外でも庭や図書館のまわり、生物学教室や大石のあたりなど、三々五々たまったりよんどんだりしていました。

頭の疲れは授業です。授業の密度は高く、先生方の教え方はとても上手です。滑らかに進むので、その流れに乗

ってノートを取って考えていけば自然と学力が付きそうです。授業に集中するのが大事というの昔も今も同じですね。みんなの態度も先生に集中し、机の移動音や私語もなく立派なものです(どこかの大学生に爪の垢を煎じて飲ませたい)。先生方もみんなを大事にしている感じがうけました。昔より内容も多いようで、錆びついた頭には酷な体験でした。

思えば、我々の頃はひどいものでした。授業中に弁当を食う奴、内職(他の勉強や本を読む)、代返してもらってフケるのもしました。先生もそうです。脱線ばかりの先生、その場で解答を考えながら解いている先生もいました。君たちの場合は「声が小さい」とか、答えられないと「こんなこともわからないのか、次」などと怒る先生はいないんでしょうね。生徒にはもっとヒドイのもいて、先生に当てられると堂々と「わかりません」と言い切るの

や、当てられて困って隣の奴に解答を教えてもらう奴(助ける奴も)もいました。とはいえ、仲間といっしょに勉強したり、試験前だけは必死だったたり、やるときはやるという生徒が多かったのです。

昼食は弁当持参が多いようでしたが、僕は昇降口近くで並んでパンと牛乳を買いました。種類が多く目移りしました。人気があるのは売り切れるとこのことです(我々のころは焼きそばパン?)、今は何でしょうか。みんなは友だちと教室で食べていたようでしたが、先生の研究室や部室には行かないでしょうか。

我々のころは、研究室(理科系が多かったが、音楽や美術なども)に、なかをさっかけに、それは担任だったり、部活顧問だったり、兄が世話になった、単に友人がいるなどですが、昼食の時や放課後に居着いて、先生と雑談したり、そのうち東京の先輩が来たり、という交流もありました。そういう中から、いまでは大学教授や第一線



昼休み パンの販売

の研究者が育っています。学問の息吹に触れたんでしょうね。他に、図書室、学友会室、学館の部室など、いくつかもグループがありました。

午後の授業は眠いのになんかよくがんばっていました。そういえば生徒諸君、みんな清潔な服装で、茶髪や化粧もあるけれども好感がもてる身だしなみかほとんどでした。我々の頃はひどいもので、男子は、垢で光った学生服や煮しめた色の元白シャツなど、汚いのはざらでした。冬にはチャンチャンコもありましたね。一方では整髪料でピシッと固めてカッコつけたのもいて、男ばかりだとむさ苦しいというか、個性があったというか、そういう風俗でした。女子は地味がモットーでした。下足のまま廊下上がるのは多いし、(当然、学友会はたびたび警告するのですが!)その廊下もオイルびきで独特のにおいがしていました。今の校舎は掃除しやすそうですね、トイレも雲泥の差、別棟なのに梅雨の時期は悪臭が近くの教室に流れてきました。

学校全体の雰囲気は明るく清潔で、ちょっとはなやかに感じましたね。生徒諸君も屈託がなくのびのびしており、学友会の掲示も多く、活発さを感じます。一人ひとりとは真剣に考えたり、努力したり、悩んでいたりと頑張っている様子が見えます。でも、猥雑な感じがなくつたと同時に、お互いが論争したり、いい意味でのケンカしたりが少ない感じを受けました。一人ひとりの考えが外に出ない、答えは書けるが授業中の質問や討論が少ないという印象をうけました。「自治」「千萬人」とは、互いに干渉しない、されないのではなく、自分の考えを持って他の人と切磋琢磨して、互いを認め合い、自分たちで切り開いていく精神だと思っております。全体として環境も良くなり、先生方や親御さんも理解があり、なんとなく生きていける、そういう時代だからこそいっそう大事なのかもしれない(筆が走りすぎたかも、ゴメンネ)。

ともあれ、高校時代に友人をつくり初志を得るといことは人生の財産になります。後期は学友会長とのごこと、健康に気をつけながら一日一日を大事に過ごしてください。

追伸 音楽の教材はフォークソング「あの素晴らしい愛をもう一度」とピートルズ「イエスタデイ」でした、ちょうど我々世代の曲です。懐かしさと、もう戻ってこない高校生時代をかみしめる気分になりました。選曲された牛山先生にお礼を伝えてください。

清陵アルバム



新入生歓迎会
談話会で部活動誘

在校生・同窓生 交流会 2002

～雲立ち迷う時代を生きる～

清陵の伝統、
進路、生き方を求め、
在校生と同窓生が
17分科会に分かれて
討論を行った。

2

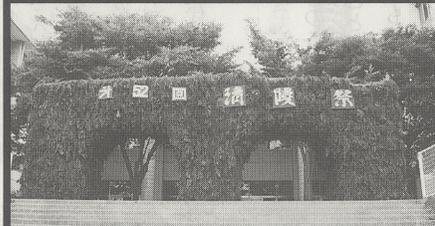
今の清陵生は昔とはえええ違いた、
という声をとときき耳にする。本当の
姿はどうなのだろうか。そんな疑問を
抱いて、昨年の学友会との話し合いの
中でワークシヨップ(協働討論)の開
催を提起したところ、生徒側から、先
輩達と交流の機会が少ないので、清陵
祭公式行事として生徒が全員参加して
の交流会(例年の文化講演会のかわり)
を実施できないかとの提案がなされ
た。幸い、在校生の熱意のもと、多く
の同窓生の協力を得ることができ、全
生徒が第一線で活躍する専門家等を迎
えて一七の分科会で話し合う「在校
生・同窓生の交流会二〇〇二」を実施
することができた。その経過やあらま
しを紹介する。

開催趣旨と交流会に至るまで

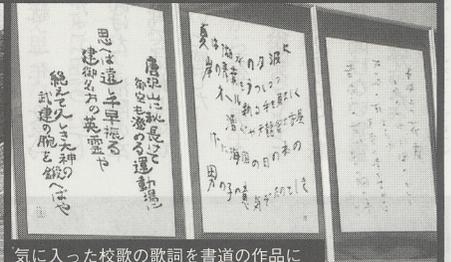
せっかくの機会であるので、在校生



清陵祭開会式で「金色の民」(市民新聞グループ提供)



清陵祭のゲート 杉の葉飾りは変わらない



気に入った校歌の歌詞を書道の作品に

交流会

には、清陵の伝統に対する理解を深め、
自らの進路や生き方を探り多角的なも
のの見方を得る機会にしたい、あわせ
て、同窓生にとっても後輩達への支援
にとどまらず自らの今後の手がかりに
なるような交流会にしたいと考えた。
そこで、次頁表の経過をたどって実現
した。なお、在校生の希望に応じて多
くの同窓生が快く手弁当で参加してく
れたこと、先輩と相談しながらも生徒
側の担当者が進行及び、記録づくりな
ど大変な仕事に取り組んだことは大き
い成果である。

「廊下を歩いている生徒がいなくて
すね」と見回りの先生が言われるとお
り、分科会の間中、廊下は静かだった。
その静けさが教室内の緊張をうかがわ
せた。

林尚孝会長のあいさつ、「金色の民」
など、にぎやかな清陵祭開会式に続い
て、各分科会の会場に移動した。方形
に机を並べた会場、車座に講師を囲む
形、講義形式と思いきいの会場形式で
分科会が行われた。

分科会終了後、同窓生の反省会を行
った。ここでの発言と在校生の感想の
一部をあわせて掲載し、交流会の様子
を紹介する。

最初は生徒の発言を引き
出すのに苦労し、ようや
く参加者の関心がま
り、話の焦点が見え、乗
って来たところで時間
になってしまった、時間不
足で惜しかったというの

交流会のあらまし

- 名称: 第52回清陵祭文化講演会企画
諏訪清陵高校「在校生・同窓生交流
会2002～雲立ち迷う時代を生きる」
- 日時: 2002(平成14)年7月6日(土)
- 参加者: 生徒全員776名
同窓生72名
(東京清陵会48、長野県内21、名古屋1、広島1 以上氏名把握分)
- 進行: 8時30分～参加者受付開始
9時～ 清陵祭開会式及び交流
会オリエンテーション
(林会長挨拶等)
9時45分～分科会会場に移動
10時～ 分科会で話し合い
(ここまで生徒全員参加)
11時30分～成果をポスター(模造紙)
にまとめる
12時15分～まとめ終了、図書室前に
ポスター展示

分科会12 "脳と身体と心を探る"

コーディネーター: 甲村幸春(44回) 在校生: 赤羽さつき(2-1)
スピーカー: 榎原尚紀(81回) 幹事: 石田京平(1-3)
アシスタント: 土橋龍太郎(90回) 司会: 浦野智太(1-3)
在校生参加人数: 26名

1. パーソナルロボットとの交流
A180等のロボットを使い、それらのロボットとの話し合い。感情を表現する人間と比較し、感想を述べた。

感想
・愛想があくあいた。・動きがロボット化して驚き、表情が豊かになっていくことに感じた。

アンケート
Q1 感情がわかるようになった。 → 51%
Q2 感情を感じることができた。 → 88%
Q3 愛想を感じた。 → 21%
Q4 愛想を感じることができた。 → 98%
Q5 いくらでも愛する気になる。 → 300円(70%)、1万円(20%)、1万円～(5%)

2. 脳と心はどのようにしているか?
扁桃体... 感情の判断
海馬... 記憶をつかさどる
前頭葉... 知性のコントロール

ペーパードット回路
扁桃体が「好き」と判断すると、その人の記憶が「好き」側に回る。

ヤコブレフ回路
前頭葉の発達により「好き」or「嫌いな」の二つに分かる。

3. どうすれば「やる気」が出るか?

12分科会「脳と身体と心」で話し合った成果を在校生がまとめたポスター



在校生の手形、足形で書いた清陵魂

が、全体の流れだったようだ。交流会自体については、「いいことだから、なんらかの形で続けることを考えたらどうか」との、第一分科会に参加された有賀裕同窓会副会長の発言に尽きる

清陵アルバム



清陵祭前日には恒例の「仮装行列」
(市民新聞グループ提供)

だろう。ただ交流会の持ち方については、テーマが漠然としていた、時間不足、あるいは地元同窓生との協力のあり方などの反省点があげられた。

現在の清陵生に対する印象としては、ほとんどの分科会で生徒の発言が少なかつたこともあつて、おとなしい、真面目だとの感想が多かつた。しかし発言が少ないからといって自分の意見をもっていないわけではなく、一人一人に訊けば、それなりに発言できる生徒も多い。テーマや時間配分などの進行のあり方とも関わる今後の課題だ。

また女子生徒が多く、しかも活発なことに驚いたとの発言もあつた。

在校生の反応

例年の講演会にくらべて、今回のような分科会形式がよいとする回答が七〇%近くに達し、当日の分科会については、「大変よかつた」との回答がほぼ五〇%、「まあまあよかつた」まで含めると九〇%近くになる。その理由としては、分科会形式ならば関心のあ

るテーマを選べること、また発言や質問できるからとの理由もあげられている。後者については感想文抜粋を参照してほしい。

在校生世話人の感想文にみるように不安と緊張でいっぱいになりながらも、また記録係はヘトヘトになりながらも、ともかく成し遂げた満足感をもつてくれたようだ。そして参加した在校生たちは、先輩たちが一所懸命教えてくれたことを、記憶のどこかに留めてくれたに違いない。ともあれ初めての試みとしては成功裏に終えることができたことを報告する。なお交流会の記録は別途作成中である。

世話人の感想から

○今回のような分科会の形式は初めての試みで、不安なことばかりでした。けれど、手伝ってくれた友達、そして、両先生のご協力によってうまく進めることができました。参加した生徒も、みな興味を持って聞くことができました。自分が将来進みたい道に対して新たな目標を見出せた生徒もたくさんいたはず。今回の分科会で得たものを生かし、少しでも、これからの社会に貢献できればよいと思います。

○かなり濃い内容を話せたと思う。講師の先生から相談の受け方、参加者から保健室登校、不登校の体験などを聞くうちに、「悩むことは自然なことではないか」と考えられるようになった。参加者で悩みを話しあったことで強い

親近感を持ち、たくさん知り合いができた。一年生二人で本当に分科会ができるのかと心配したが、いろいろお世話いただきありがとうございました。(13現代社会とこころ)

参加者の感想から

交流会までの主な経過

- 2002年
- 2月1日 学友会と同窓会(本部・東京)の交流会(OB 10・現役 12)、交流会の必要性が提起される。
- 3月7日 「東京清陵会だより」取材の一環として学友会役員との懇談会(OB 4・生徒 7)、在校生・卒業生との交流イベントのあり方などについて話し合う。
- 3月27日 清陵祭実行委員会との話し合い(OB 2・生徒 6)、生徒会全員参加の交流イベントが提起される。検討テーマの候補案を意見交換する。
- 4月初旬 若い世代の卒業生15名にメールで予備アンケート、半数以上から協力しようとの返事を得る。
- 4月中旬 生徒による交流希望テーマの予備アンケート、心理がトップ、次いで外国暮らし
- 4月29日 交流会打ち合わせ(OB 5・生徒 3)
- 5月中旬 分科会ごとに進め方、世話人の選定等を行う。清陵祭プログラム印刷。
- 5月25日 東京清陵会学年幹事他(101人)及びメール保持者(512名)に案内を発送し、参加をよびかけ(「東京人名録」がきわめて役立った)。なお、若いOGから申し出があり分科会が追加される。
- 6月1日 清陵祭文化小委員会と打ち合わせ(OB 2・生徒20)、進め方、記録の取り方等を打ち合わせる。在校生対象に希望する分科会アンケートを行う。
- 6月中旬 各分科会の同窓生世話人と在校生世話人が連絡を取り、進め方を相談、ゲストスピーカーの依頼等を行う。
- 6月29日 最終打ち合わせ(OB 3・生徒38)、会場等を最終決定する。
- 7月5日 会場前日準備

(その他、清陵祭実行委文化小委員会や東京清陵会の内部、学校、同窓会本部等の連絡等が適時なされた。)

在校生の感想から

世話人の感想から

○今回のような分科会の形式は初めての試みで、不安なことばかりでした。けれど、手伝ってくれた友達、そして、両先生のご協力によってうまく進めることができました。参加した生徒も、みな興味を持って聞くことができました。自分が将来進みたい道に対して新たな目標を見出せた生徒もたくさんいたはずです。今回の分科会で得たものを生かし、少しでも、これからの社会に貢献できればよいと思います。

○かなり濃い内容を話せたと思う。講師の先生から相談の受け方、参加者から保健室登校、不登校の体験などを聞くうちに、「悩むことは自然なことではないか」と考えられるようになった。参加者で悩みを話しあったことで強い

親近感を持ち、たくさん知り合いができた。一年生二人で本当に分科会ができるのかと心配したが、いろいろお世話いただきありがとうございました。(13現代社会とこころ)

参加者の感想から

○今と比較しながら昔のことを知り、伝統の重さを感じる事ができた。地方会のことについても聞いてよかつた。定期的にこういう会を開いてほしい。(1清陵の伝統 一年 女子)

○自分の知りたかつたことについて、いろいろな考え方を聞いた。清陵の卒業生はさまざまな分野で活躍している、清陵の伝統はすごいと感じた。

(3 大学とは 一年 男子)

○社会が、その仕事に求めることと、実際の状況のギャップがあることに驚いた。ふだんでは絶対に聞けない貴重な話を聞くことができてよかつた。

(6 法律を生かす 二年 女子)



分科会17 交流会の状況

分科会9 広島からもパネラーが

分科会12 アイボと遊ぶのも大事な学び

分科会1 在校生の意見も交えて話し合い

不安だらけ、でもやってよかった

(清陵祭実行委員長文化小委員会)

田中史織

今回、在校生・同窓生交流会ということで過去にやったことのない分科会形式で文化講演会を行ったわけですが、今終わって思うことは「とにかく良かった」ということです。何が良かったかという、終わってからの周りの評価・感想もなのですが、私自身、無事終わらせられて安心したというのが一番大きいです。

私が文化小委員長となったときは、まさかこのようなことを企画するとは夢にも思っておらず、清陵祭実行委員長の荒川あゆみさんにこのお話を聞いたときは大変驚きました。しかしあまり深く考えずに「おもしろそう」という理由で、この企画を実行するにいたったわけなのですが…。

正直な話、私はこの交流会は本当に成功するのかもしれないと心配でした。簡単な気持ちで引き受けてしまったことを後悔した時期もありました。何より不安だったのは、分科会として一七に分けることでした。小委員に各分科会の担当をしてもらったのですが、私自身初めての試みで一切勝手を知らなかったため、委員もみんな戸惑ったと思います。とにかく不安だらけでした。し

かし、どの分科会も、委員と同窓生側の世話人の方々のおかげで何事もなく全て順調に進み(なかにはかなり大変だったところもあるようですが…)、感謝の気持ちでいっぱいです。

私は一応、文化小委員長ということになっていたのですが、本当に、井口康孝くん、赤羽さつきさんが副委員長でよかったと思います。二人がいてくれたからこそ在校生側がなんとかなった、という感じです。

在校生の終わってからの感想としては、「時間が短かった」「もっと詳しいつこんだ話を聞きたかった」などがあつたのですが、これもすべて興味深い話が聞け、有意義な講演会だったということではないでしょうか。ほとんどの生徒に好評で、やってよかったなあとと思います(先生方にもかなり好評でした)。私も参加した分科会では将来必ず役に立つであ

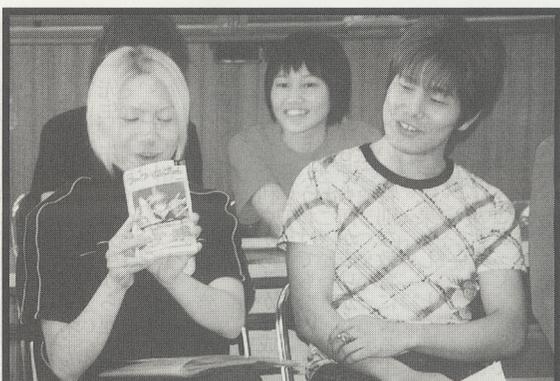
らうお話を聞け、有意義な時間を過ごすことができました。本当に素晴らしい文化講演会になったと思つています。諸先輩方に大変貴重な話をしていただいたことは、在校生にとってかけがえのない財産になると思つています。本当にありがとうございました。

分科会と同窓生世話人

- 1 清陵の伝統 -変わったこと、変わらないこと- 矢島舜孝 (69回 都立西高教諭)
2 混迷の21世紀をどう生きるか-現代社会と清陵魂- 林尚孝 (52回 東京清陵会会長・茨城大学名誉教授・農学)
3 大学とは -大学に行く意味、行かない意味- 八巻和彦 (69回 早稲田大学教授・哲学) 青沼水門 (69回 ハリウッド美容専門学校教務主任)
4 活躍の場はグローバル -外国暮らし、留学、仕事そしてコミュニケーション- 百瀬達朗 (69回 セイコーエプソン) 福島英雄 (69回 会社経営、町議)
5 情報と教育 -IT社会とリテラシー- 吉江森男 (69回 筑波大学教育系助教授・教育学) 田中聡久 (96回 東京工業大学・日学振特別研究員・情報工学)
6 法律を生かす 横内淑郎 (68回 弁護士・横内法律事務所)
7 環境-地球温暖化への挑戦- 功刀正行 (69回 国立環境研究所主任研究員) 一ノ瀬俊明 (85回 国立環境研究所主任研究員)
8 自然科学入門-宇宙と海- 比田井昌英 (69回 東海大学教授・宇宙物理学) 増沢敏行 (69回 名古屋大学教授・地球化学)
9 先端科学技術の世界 有賀一温 (75回 ガートナー・ジャパン (株))
10 都市・建築・デザイン -明日の都市を創る- 倉田直道 (68回 工学院大学教授・都市デザイナー)
11 「医」を考える 小松郁俊 (69回 医師・小松内科クリニック院長)
12 脳と身体と心をさぐる 篠原菊紀 (81回 諏訪東京理科大学助教授・脳システム論) 平林千春 (69回 マーケティングコンサルタント)
13 現代社会とこころ 内田良子 (64回 子供相談室「モモの部屋」)
14 心理学、そして心理学を生かした仕事とは 鶴飼順一 (71回 陽和病院・臨床心理士)
15 表現を志す -音楽・演劇・マンガ- 浜 初美 (69回 元「青年劇場」所属俳優)
16 メディアの仕事 -新聞・雑誌・TV- 北原克彦 (69回 メディアプロデューサー)
17 働く意味、女性と仕事 村上あかね (95回(財)家計経済研究所研究員・社会学専攻) 山田美佐希 (95回 県立中野実業高校養護教諭 育児休業中)

○高校ではあまり深くやらないので、今回の講義は大変勉強になった。先輩たちのような仕事をやりたいので、勉強はヤダけどがんばっていききたい。(7環境 二年 男子)
○講義を聴いてワクワクした。学ぶことを楽しく感じたのは久しぶりだった。分科会だと好きなテーマを選べるのがいい。(8宇宙と海 二年 男子)
○「人間は元からある自然の一部を利用させてもらっている」という言葉の意味を深く感じた。いま理系と文系で迷っているが、人間として両方とも大事だとわかった。(9先端科学技術 一年 男子)
○やる気と、恋愛と勉強とに結びつきがあるかとわかっておもしろかった。自分によくあてはまる所があつたので、これからの生活に生かせそうな気がした。もう少し深いところまで聞いてみたい。(12脳と身体と心 三年 女子)

○決心がついた。自分のしたいこと、見たいこと、聞きたいこと、いろいろなことが改めてみつかった。時間はあるのでゆつくり歩んでいきたい。これからも在校生と同窓生の接点を望む。(15表現を志す 三年 女子)
○自分の意見が言いやすかつたし、小人数で集中して話が聞けて、雰囲気もよかつた。同窓生の話も大変参考になつた。男子も育児に関わるようになればいい。もっと卒業生と交流がしたい。(17女性と仕事 三年 女子)



分科会15 ロックミュージシャン、マンガ家の若い同窓生二人も参加



分科会13 カウンセラーを囲んで話し合い

明日へ

3

伝統が、
清陵の未来をつくり、
清水が丘の日々が、
明日につながる。

伝統の復活か、新たな挑戦か
諏訪清陵の
スーパーサイエンス
ハイスクール(SSH)
指定

小松夏樹(86回)

一年生の夏に早くもドロップアウトし、授業に出た時間よりマージャンに費やした時間が多かったであろう恥ずべき高校時代を送ったあげく、未だに何回生かも知らず同窓会費も払った覚えもない。そんな身であつても、「ウシマサ」の伝説は知っている。「三沢文庫」も聞いたことがあり、ほろ校舎の天文台も覚えている。だがさすがに、卒業二十年后、母校にSSHの取材に訪ねることになろうとは思わなかつた。人生は分からない。

本音はエリート(校)養成

国の教育に対する方針も筆者にはよく分からないのだが、二〇〇一年はそれが大幅に揺れたのは確かだった。文部科学省上層部が、これから強化しようとしていた「ゆとり教育」を見直し、基礎基本の徹底と「伸びる子を伸ばす教育」を打ち出したのである。

個性を重んじるとかなんとか言いながら結果平等を旨としていた同省にとって、「才能教育」の重視は思い切った転換ではあつた。「このままでは科学技術分野で世界の後塵を浴び続けることになる」という危機感が、横並び重視主義に勝つたのである。

同年夏に施策決定されたSSHは、この政策転換のシンボルと言つていい。SSHは、文部科学省が直接予算を出す「研究開発校」に位置付けられる。一線の科学者による講義、実験や観察中心の授業などで理数教育を強化し、科学技術分野で活躍する人材を育てようというものだ。

一応、同省は「理数重点のカリキュラム開発」と「高校、大学、企業の密接な連携を通じての人材育成」を期待するとしていた。だが本音は「エリート(校)養成」への第一歩だ。ただし、ここでいうエリートとは、東大法卒のうち一種試験合格のち財務省入省といった人材をイメージしていない。別の指定校教頭の言葉を借りれば、「さまざまな分野(この場合は科学技術)で社会に貢献するリーダー的人材の育成を目指す」ということだろう。

SSH計画には全国から七十七校の

応募があり清陵を含む国公私立二十六校が選ばれた。直轄指定校と言つても、国は研究内容にはそれほど口を出さない。何をどう学び、どんな成果を狙うのか、指定された二十六校とも試行錯誤の船出である。研究期間は原則三年。予算は研究開発校としては破格で、一校年間最高二五〇〇万円だ。通常は百万円位だから、公立校には夢のような金額と言える。高度な実験器具の購入や、講師への謝金などが使途になる。

SSHには、「一部生徒を優遇し受験に駆り立てる」といったおさまりの批判もあるが、全体を見渡しても各校の計画には受験重視の内容は見られず、生徒全体の意欲や学力の底上げを図りながら、核心である特別クラスも編成、という組み立てが多い。ただ、これには、旧文部省勢力の悪平等主義も影響しており、もっと大胆な取り組みも出て来て良いはずだった。当初、省内からは「意欲ある生徒を選び、外国の大学や研究機関に派遣して交流してもらうのもいい」とのアイデアも上がっていたのである。

清陵の特長は企業、OBとの提携

さて、並み居る強豪の中、SSHとしての清陵には特長が二つある。一つは、大学のみならず企業、つまりセイコーエプソンと密接に連携したこと。もう一つは、理数分野で活躍する多彩なOBとのつながりである。

企業との連携は、ほかの指定校にはほとんど見られないアドバンテージで、実は遠山文部科学相が一番取り組

んで欲しかったことでもある。企業との接触は大学のそれと違い、生徒が具体的な職業、技術、分野をイメージしやすい利点がある。今回想定されている、「プリンターの仕組み」や「GPSのアルゴリズム」などの同社研究者提供講座は企業独特のものだ。研究所訪問、先端技術を体験する工場見学も予定されている。一〇年前なら、公立高が企業と関係するなど考えも及ばないことで、製糸、精密工業から続くハイテク産業に立脚した土地柄をフルに活用した功績は大きいと思う。

OBとの連携重視(エプソンとの連携もその一形態である)も、「伝統校」ならではの財産を活用するもので、「過性になりがちな高校教育の活性化につながる」と、SSHの評価を行う専門家も評価している。今回の指定を機に作られた同窓会研究者名簿には、一線で活躍する科学者がずらりと並ぶ。郷土に根ざした地理学の研究に打ち込む一方、科学的探求心を生徒に養わせた三澤勝衛先生、その愛弟子藤森栄一先生、牛山正雄先生から連なる系譜といつてもいいのだから。

目標は高く

ただ、こうした利点があるから成功間違いなし、というわけでもない。SSHでは、そもそも何が成功かもはっきりしていない。特別な教育による生徒のどんな変化を成果とし、どう評価するかは今後の話だからだ。

SSHの評価にあたる一人、重松敬一・奈良教育大教授(数学教育学)は、

「単なる大学入試実績で評価する気はない。世界に羽ばたける人材を輩出できれば良いが、一部ではなく、様々な生徒が伸びるチャンスがあるべきだ」という。清陵の堀金達郎教頭は、「科学のどいご味に触れてもらい、骨太な科学者の卵を育てたい」という。その通りだが、やや目標が甘い感もある。アメリカでは、企業の研究機関を借りて実用的実験を重ね、論文を発表し、特許を取る高校生も珍しくない。SSHがこのレベルを目指しても一向に不思議はないはずだ。

SSH少数人数クラスの編成などには、理系を選択しない生徒が不平等を被るという声もあるが、これは的外れに思える。そもそも人間に理系も文系もなく、科学技術を生業にしない場合でも数学的・科学的の尊重や科学的思考がいかに大事かは言をまたない。SSHは「文系」にも好影響があるはずなのだ。

また、建前よりも、目に見える成果が求められているのも確かだろう。現在は学区の拡大などにより、隣県の私立高や、松本深志高校への諏訪地区中学生的「頭脳流出」も起きていると聞く。SSHは、今後長野県で予想される大学区化や競争原理導入に対する清陵の「生き残り」策でもあるはずだ。いわゆる偏差値重用の大学入試実績とは異なるだろうが、教育・研究で真に成果を出している先進大学への進学実績は求められて当然ではないかと思わされる。今後三年間の母校の変化は見逃せないものになるだろう。

(読売新聞社社会部 文部科学担当)

〈清陵らしさ〉とは — 或る六九回生の体験

八巻和彦 (69回)

校風

今年の様々な催しの中で、たくさんの清陵時代の同級生たちに会った。清陵卒業以来という人たちも少なからずいた。しかし不思議なことに、すっかり変わって見分けがつかないという友人は極めて少なかった。これは、中学時代の同級生との再会の経験とも、大学時代の同級生とのそれとも異なるものだ。清陵の時の友人の誰もが、昔の面影を残している、というよりもむしろ、昔のままなのであった。

これは、何を意味しているのだろうか。清陵生はいままでたつても大人になれないということか。むしろ逆だろう。清陵という学びの場が、当時はいまだ高校生にすぎない一人の人間のもつ可能性を、たとえ萌芽的にであれ、すでに全面的に自己展開させることを可能にしていたのだと思う。これは、私自身にも当てはまりそうである。大雑把にとらえれば、清陵の三年間に考えていたことを時間をかけて展開してきたのが、これまでの自分の人生であったようにも思われるのだ。

このような展開を可能にしたのが「自主独立」と「雖千萬人吾往矣」という清陵の校風であったことは、記すまでもない。清陵に憧れて山梨から入

学した私であったが、入学式で早々にガツンと衝撃を食らった。美辞麗句の連なりにすぎない来賓の挨拶には、「シー、シー」という上級生たちの異議申し立ての洗礼が待ち受けていた。そして、拍手代わりの足踏みも。下宿させる息子に付き添ってきた母は「こんな乱暴な学校に入れたことは失敗だったかもしれない」と心ひそかに心配

があったと、後年しみじみ話したことがある。しかし新入生は、一気に納得させられた。たとえ「偉くて立派だ」とされている人であっても、中身がなければ批判してもいいのであり、それを敢行することが清陵生であるための条件なのだ、と。とはいえ、一人で他県から入学した私は、初めのうちはおとなしくしていた(と思う)。

級友たち、先生たち

五月にクラス対抗の駅伝大会があった。私はアンカーとして最終区間を走ることになった。知らない顔ばかりの各クラスの走者が頼岳寺の門の下で待機するなかに、心細い思いで私もいた。上級生たちは次々と、当然のごとくに襷を受け取って走り去っていった。自分たちは一年三部だから、走者は最後の方に来るだろうと思っ



清陵際のゲーム風景 (フィーリング・カップル5:5)

た。伴走者は自転車をおりて一緒に走ってくれた。坂の両側には級友たちもいた。前方に数人の走者がいた。「追い抜け! 追い越せ!」という声に励まされながら、最後の力を振り絞って、二、三人抜いた。皆、歓喜した。私は、上級生を最後の最後に追い抜いて、クラスを一〇位に押し上げたのだ。この実感と体験から、私の充実した清陵生活は始まった。

私自身には地方会の経験はなかったが、級友たちは地方会の上級生から、清陵の伝統たるものを教わってきては、われわれの行動の指針にしていた。先生方のあだ名はもちろん、その個性や背景も伝わってきて、校内の権威は相対化された。立派に活躍している卒業生の話も聞こえてきた。清陵出身の先生方ももとより、そうでない先生方も、清陵の伝統とそれに基づいて生活しようとするわれわれを尊重してくれている感じが伝わってきた。

そんな中で三年生の時に、「伝統」とは異なつて清陵出身ではない校長が着任した。「清陵はあまりにも規律が無さすぎる」と彼は全校集会で述べて、学校運営を始めた。それが、「校長つるしあげ」集会にまでつながった。当日、事前の相談とはことなつて、口火を切るはずの二年生執行部は動けず、われわれも互いに顔を見合わせるだけの時がしばらく続いた。私は意を決して手を挙げた。指された私には、体育館の後ろから最前列のマイクまでの道程がとて長く感じられた。私の発言を皮切りに、激しい校長批判が続き、翌日、校長は、清陵の伝統の重要性について自分の認識が不十分であった、と詫びてくれた。今でも何か迷いが生じる時、私の心にはあの時の思いが蘇ってくる。おそらく、同じような体験があらゆる清陵の卒業生に、形は異なれ生きているに違いない。

諏訪の中で

本年七月六日、現役の清陵生との交流会のために、実に久しぶりに清水が丘の学び舎を訪れた。生徒はもちろん、校舎とその配置もすっかり変わっていったので、少々面食らった。しかし、無意識のうちに清水が丘からの展望を求めて構内を歩きまわり、ついに見晴らすことができた時、「ああ、これだった」という合点の思いがこみ上げてきた。北方数百メートルに位置する「二葉が丘」、北西にその一部を遠望できる諏訪の湖、そして眼下にひろがる、高度成長の時代を経て変貌したとはい

え、未だつましやかな上諏訪の町。われわれのすばらしい(清陵の日々)は、学校という一点だけで成り立っていたものではなくて、清陵を原点として広がる諏訪という空間的座標面と、上級生や地域の人々を介して引き継がれた伝統という時間的座標面とが立体的に交差する場で成立していたのである。それは、「清陵生」という呼び方が、単に高校生の間での区別としてだけではなく、諏訪の地域全体で用いられていた(いる?) ことにも現われているだろう。

考えてみれば「清陵生」には、居なくていい生徒という範疇は存在しなかった。勉強のできる級友、運動の得意な級友に対してはもちろん、「不良」をやっている級友に対しても、お互いに一目おき合っていた。その事実には、「クラス一の不良でビリ」だったY君が今年の諏訪での総会に東京から参加してくれて、われわれはその彼との再会を大いに喜び合ったことにも表われているだろう。

われわれは、地域のあたたかい眼差しに見守られながら、各人各様の「ゴタ」をやっていたのであり、清陵の「自治と自由の伝統」とはその中に成り立っていたのである。たしかにわれわれは、自分たちの持てる力を発揮して、充実した高校生活をおくるために努力した。しかし、それを見守ってくれていた人々と地域の配慮のおかげであることも、感謝の念とともに記憶にとどめておきたい。

(早稲田大学教授・哲学専攻)

ここにこの人先輩後輩

Tomohiro Okubo

インタビュー・構成 安倍勝子／等々力節子／比田井和子(ともに69回)

小説家 大久保智弘さん(69回)

—小説を書くと思ったのは？

物語への憧れは子供の頃からありましたが、文学を意識したのは清陵高校に入ってからですね。文学部には、田

口恵一(68回)、小林力(68回)、伊藤昌司(69回)という、太宰治や堀辰雄

にかぶれた、いけない先輩や同年生がいたんですね(笑)。そういう人たちに「君の愛読書は？」と聞かれて、

吉川英治の『宮本武蔵』と答えたら、すごくバカにされた。彼らに対抗する

気持ちが出てきてから、小説を意識して書くようになった。

—処女作は？

キザなタイトルで恥ずかしいんですが、高校一年のときに文学部の『影』という雑誌に載せた「死にゆく魂」。

担任に怒られた。「飲み屋にいったのかお前は!」。想像力で書いただけに。

—歴史小説はいつから？

実は、高校時代最後の小説が「錆びた幻影」という、諏訪の近世史に題材をとった歴史小説なんです。

脱稿したのは一月一七日。皆は受験勉強の追い込み中なのに、自分は小説

を書いているという緊張感があった。だからなのか、非常に高いレベルに達していたと思う。その後、しばらくは、

これを超えるものは書けなかった。取材をされたんですか？

伊藤富雄さんという郷土史の碩学を訪ねました。当時はそういう方とは知

らず、ただの爺さんだと思って押し掛けて、病気で伏せているのも構わず

に話を聞いたんですね。生意気な高校生にも、ていねいに教えてくれました。

—実際の歴史と小説との関係は？

歴史小説は歴史を変えるようなことは書いてはいけません。史料で証言できる限りの史実を無視してはいけません。



清陵高校では文学部に属した。高校教師をしながら小説を書き続け、一九九五年、『水の砦—福島正則最後の闘い—』で第五回時代小説大賞を受賞した。広島城の石垣無断修築を理由に信州高井野に滅封配流された福島正則が、嫡男正勝暗殺の黒幕、本多正純に復讐の闘いを挑む。史実の新奇な解釈、意外な結末など伝奇的要素をも盛り込んだ物語。九月には新作『幻の城』を上梓。

Mayumi Hama

2 マリンビスト 浜まゆみさん(96回)

—清陵での高校生活はどうでしたか？

楽しかった。清陵に比べてよかったです。音楽が大好きです。音大の付属高校などでは、同じ楽器を志すクラスメートは

ライバルです。だからクラスメートと楽器をひいて遊ぶなんて考えられない。

私の場合は、家に遊びに来た友人に聞かせて、「上手だね」なんてほめられるとうれしくて、練習を一所懸命し

たり。楽しんでマリンバをやりました。

—清陵で楽しかったことは？

クラスマッチかな。端艇大会では、

身体が小さいのでコックスでしたが、ボートが真っ直ぐに進まない(笑)。

男女混合のチームで駅伝大会でも走りました。もちろん成績よりも記念に

走ろうというチームです。クラブは硬式テニス。スポーツは大好きなんです。

—マリンバの演奏者になろうと志したのはいつ頃ですか？



—「水の砦」の構想は？

葛飾北斎の調査で小布施にいったら、高井野に福島正則の墓があった。「なぜ、こんなところに?」と思って調べました。この時代の正則の史料は宗門帳ぐらいいかない。そこで、この頃、世の中に何か起こってはいないかと、年表と首つ引きで想像力を広げて書いた作品です。

—講談的な、腕力だけの単純な男とは

はつきりしないんですが、大学に入ってからでしょうか。ただ、一〇歳の時に、マリンバのためにつくられた曲をマリンバ奏者が演奏するのを間近で聞いて、ショックに近い感動を受け、「私もこういう音を出したい」と思いました。

—私もこういう音を出したい」と思いました。進路を決めるときに、大学卒業後のこ

違う正則像ですが、城主として広島街の基礎をつくった歴史的業績からみると、こちらのほうが実像に近い筈だと自負しています。

—「水の砦」の水田が実は形のない砦だったという発想はどこから？

かつて福島館のあった台地に立つて、周りの風景を眺めたときに、この着想が浮かびました。風景は歴史小説にとって大事です。その風景のなかに身を置くことによって、初めて理解されることがある。

—次作は？

江戸を舞台に、昨今のリストラされる中年を彷彿させるような、田舎出の侍が、藩に利用されながらも、おのれを貫いていく生きざまを表した物語です。

—これまで満足している自作はないので、そろそろ代表作といえるものを書く時期ではないかと思っています。

—とを考えたなら、マリンバから離れた私なんて想像できない。それで日本でただ一つマリンバ科がある桐朋学園音大に進学しました。

—マリンバの演奏は運動神経が必要そうですね。

—すごい運動量です。演奏会では、長さ一・七五メートルの楽器の前を九〇



マリンバは長さ二メートル余りの木琴に似た楽器だ。五歳から習い始め、桐朋音楽大に進み、マリンバの世界的な第一人者・安倍圭子さんに師事する。一九九九年、岡合カノホールで行われた世界マリンバ・コンクールで二位受賞。技術の確かさ、想像力の豊かさから生まれる自在な演奏は、「天賦の才」と絶賛される。米国に留学、海外でも活躍中。

分間、一人で走り回る。一曲終わると心拍数が上がって、スポーツの後みたいに息切れがします。体調を維持し、集中力を保って、い

かに本番に最高のパフォーマンスを表現するか。そういう点では、スポーツに似ているかもしれません。苦しかったことはありませんか？

3

宇都宮美術館長・美術評論家 谷新(小口牧通)さん(69回) にあたら

谷新(小口牧通)さん(69回)

美術にはもともと関心がおありだったんですか？

高校の芸術専攻は迷わず美術を選びました。ゼッチャン(宮下琢郎先生)の授業は、晴れた日は写生と決まっていた。三〇分ぐらいで絵は描いてしまつて、あとは探索と称して遊んでいた。裏山のぶどう畑からは二葉高校の全景が真正面に見下ろせるんですよ(笑)。アーティストを目指すという志向性はなくて、学校の先生をしながら、好きな美術をやりたいと思っていました。

それで教育学部には？

ちょうど七〇年安保の最中でしたから、教師になるために勉強していることがバカらしくなって、どんだんラジカルになり、ついには教育実習で担当

の先生とも折り合いが悪くなり、結局、教職員試験は一度も受けませんでした。高校の教育実習では、先生の教育方針に意見するし、先生の描く絵まで批判していた。こういうことは教育界ではすぐ伝わるんです。教師が見かねて市川の高校を紹介してくれました。その校長が面接のあと、別れ際にチラッと、「君には色々問題があるようだ」。

書くのは好きだったのですか？

大学で詩のサークルに入って、詩を

書き始め、学内の文芸誌で美術評論も書くようになった。清陵のとき、ガマさん(平沢武男先生)に「関心を抱いている哲学者について書け」という課題レポートがあつて、カントについて書いたら、ほめられたのを覚えています。

美術評論募集に応募したのは？

募集していたのは就職試験を受けた

ミシガン大学大学院に留学しているときでしょうか。言葉はわからない。特別なプログラムで留学したので、皆から、彼女はスペシャルなんだという目で見られる。慣れない環境でプレッシャーを感じ、悩みながらマリンバをひいていました。そういう時に岡谷でのコンクールがあつたんです。結果はどうであらうと、ともかくこのコンクールに出て、マリンバを止めようかと思つたくらい自信をなくしていました。そうしたら賞をいただける。

Yurata Tani

マリンバとパーカッション 浜まゆみと

ミシガンの仲間たち

九月九日(木) 午後七時開演
文京区シビックホール 全席自由
前売三三〇〇円、当日四〇〇〇円
連絡先〇三三九二五二一六五二

外国人と日本人との演奏の違いを感じますか？

日本のマリンバはレベルが高く、日本人が作曲した曲も多い。掛け声など、日本的な要素が入っている曲もありま

す。「ヤツ」というような日本の掛け声は、次の音に入るために、そこで集中力を高める「間」といつていいものだと思いますが、その感覚が外国人にはわからない。大きな声で「ヨイ」とのぼしたり、「イーヨ」となったり。これからの抱負は？

マリンバは、世界的には打楽器と捉えられていますが、ピアノのようにメロディラインもひける楽器だと思えます。楽しい曲をアレンジして、演奏会のプログラムに加え、そのようなマリンバの良さを伝えたいと思います。



一九七二年、美術出版社・芸術評論募集で第一席になり、以来、現代美術評論を中心に活躍。アジア現代美術の調査や、国際美術展のベニス・ビエンナーレ展、光州ビエンナーレ展などでコミッションナーとして、作品や作家の選考にあたる。一九九五年から宇都宮美術館開設に携わり、一九九七年館長、著書「回転する表象―現代美術/脱ポストモダンの視覚」など。

ことのある出版社でした。最終面接ではねられたんですが、「君は、論文がひじょうにおもしろい」と言ってくれた。そんなこともあって、美術評論はこれを最後にしようという気持ちで、「芸術における制度の問題」というタイトルで応募したら、それが受賞した。以来二〇年、業界誌の編集者をしながら、現代美術の評論を書くという生活が続きました。

日本の現代美術の状況は？

日本の現代美術はいま正念場にかけています。中国、韓国はパワーがあります。それは日本が近代の成長期にあつたときと同じです。日本は、東アジアのなかで近代美術をリードするという一定の役割を終え、成熟した時代の美術をどう扱うのかという、新しい課題に直面しています。

いまの日本のアートは、アニメ的、かわいらしく、女性受けするようなもの



宇都宮美術館

の、マスカルチャーとリンクしているものばかりがなくなってきている。

館長として

生活と芸術という観点から、デザイン作品もコレクションしています。近・現代の美術をこれまでと違った角度で捉え、既存の美術館とは違ったカラーをだしていきたい。また個人的には、この間書いた評論や論文を順次にまとめたと思っています。

東京清陵会有志 大坪画伯(57回)の作品を母校へ寄贈

寄贈されたのは、第一校歌の冒頭、「東に高き八ヶ岳、西には浸す諏訪の湖」にちなんだ「八ヶ岳遠望」と「諏訪湖全景」の二点。昨年の『東京清陵会だより』一〇号の特集「伊藤長七・寒水の足跡を訪ねて」に掲載された作品である。幹事の68回生が長七作詞の第一校歌をテーマとする作品を水墨画家大坪靖氏に依頼、快諾された。作品は昨年一〇月の東京清陵会総会でも展示された。

母校への寄贈は、本部定期総会前日の六月二八日に、大坪さんと有志代表の寺島亮三さん(58回)が清陵高校を訪れ、窪田孝美校長に手渡した。



向かって左から、窪田校長、大坪さん、寺島さん

南信同窓連会長就任にあたって

林 尚孝(52回)

南信同窓連とか東京同窓連という名前を初めて聞かれる方が多いのではなからうか。南信同窓連とは、「長野県南信地区高等学校同窓会東京連合会」の略称である。南信同窓連は、今から三〇年前に、森元紀美雄氏(諏訪清陵)、小坂留重氏(上伊那農業)、小澤肇氏(伊那北)らによって創設された。南

信地区には高校が二八校あるが、現在の加盟校は二二校である。初代会長は森元紀美雄氏(清陵25回)であり、第四代会長は小口禎三氏(清陵36回)であった。当初南信同窓連と諏訪清陵の関係は緊密なものがあつた。しかし、

その後東京清陵会は積極的な活動には参加してこなかった。

南信同窓連の運営は、諏訪、上伊那、下伊那の三地区を単位として行われ、会長、副会長も三地区の回り持ちとなっている。今回、諏訪清陵と諏訪二葉が常任理事の当番となり二校の中から会長を出すことになった。そんな事情から図らずも第一六代南信同窓連会長を私がお引き受けすることになった。

六月一五日に虎ノ門パストラルで三〇周年記念総会が開かれ、一八校から六一名が、東京同窓連その他から四名が出席した。この総会で、林正会長

笠原延元さん(29回)のご冥福を祈る

笠原さんは上諏訪駅前笠原歯科医院の長男として明治四四年二月一日に誕生され、日本大学医学部に進み、内科医として一生を捧げられました。長い間東京支部の幹事を務められました。同級生の転居や死去をその都度葉書で連絡して下さる几帳面さに感動しました。人名録制作に際して電話をさしあげたところ、笠原さんはしつかりした声で「三年寝たきりの生活をしているが、いつも清陵のことは忘れない」といわれました。人名録の縁で、令弟の尾沢政人さん(38回)と笠原邦久さん(44回)からお話をうかがいました。諏訪市済生会病院に勤務されていたとき咽頭結核にかかり再起不能と診断されました。政人さんの縁で入手できたストレプトマイシンにより奇跡的に回

(飯田長姫)から林尚孝にバトンタッチが行われた。因みに、副会長には、林友昭(辰野)、永井乙事(阿南)の両氏が選任された。総会議事の後、中條高德氏(アサヒビル名誉顧問)による記念講演「日本の心」が行われ、和やかな懇親会に移った。

南信同窓連の活動には、総会その他に、秋の親睦旅行会、忘年会、新年会、ゴルフ会などがある。親睦旅行会は一泊二日で、一昨年は修善寺、昨年は塩原へのバス旅行が行われた。いずれも綿密な計画の元に実施され、有意義なものであつた。南信同窓連会長は、自動

小坂敬直君(40回)を悼む

復され、昭和二四年に上京、品川区のみなと診療所で診療に当たってこられました。諏訪映画の会が霧ヶ峰に建立した長塚節の記念碑にも名を連ねる文人でもありました。長期にわたる東京清陵会へのご尽力に感謝し、ご冥福をお祈りいたします。二〇〇二年四月二二日没。享年九一(林 尚孝記)

述志会(昭和一四年卒業、四〇回生の学年会)の名幹事、小坂君が忽然としてこの世から消えた。健康そのもので「生きている限り世話役は引き受けたい」と終身幹事を確信していたのに、誠にあっけなく逝つてしまった。

東京都の教育に力を注ぐこと四十有余年。誠実にして気さくな人柄は教育者として申分なく、まさに天職に生きたとすべきでしょう。

的に東京同窓連副会長に就任することが慣習である。東京同窓連は、「長野県高等学校同窓会東京連合会」の略称で、北信同窓連(二一校)、東信同窓連(一九校)、中信同窓連(二二校)と南信同窓連の連合体である。会長は中藤照美氏(松本深志)である。南信同窓連と同様に、総会と新年会、ゴルフ会が行われるほか、会報を発行している。今年の第三九回総会は、七月六日に日本教育会館で開かれ、二〇八名が参加した。

任期は二年間であるが、皆様のご協力を切にお願いする次第である。

高尾利数 49回 著

『清澄の日々』 『ロマン 諏訪中学』

「私の生涯において、最も清く住んでいた日々」、「人生の「核」をなすようなものを与えられた」。

終戦の前年、山梨県から諏訪中学に転校し、清水が丘に三年を過ごし、高尾氏が、還暦を迎えて、諏訪中学時代の思い出を綴った私家版の書を、名取小一氏をはじめ同期生が中心になって刊行した。

購入方法・なり企画広報社宛、ファックス(〇三・五三九〇・四四九七)で申込(送料込二二〇〇円)



五〇周年記念双樹会総会

林 尚孝 (52回) 記

「清陵出てから二〇年、今じゃ・・」と五万節を歌っていたのに、卒業して五〇年が経ってしまった。これを記念して、双樹会(52回・55回)総会が五月一九日に、蓼科グランドホテル滝の湯で開催され、九二名(うち来賓一名、夫人一六名)が参加した。



これに先立ち、地藏寺において篠崎知足方丈(59回生)が導師となり、慰霊法要が営まれ、一九九名が焼香した。同期在籍者三五〇名のうち五〇名が既に旅立っている。

午後一時から滝の湯で囲碁大会が開催され八名が参加、午後四時半から三浦久(67回)ライブコンサートが行われた。

総会では、立川義明先生(37回)が洒落な挨拶をされ、五十余年前の光景が甦った。宴会は、札幌から夫妻で参加された藤澤昭君の乾杯で始まり、あつという間の二時間半が過ぎた。その夜遅くまで各部屋で談笑が続いた。

翌二〇日「歩こう会」二九名は、午前九時、横谷溪谷トレッキングに向けて渋川温泉を出発した。天候に恵まれ、小鳥の囀りを聞きながら、新緑の道を歩いた。横谷温泉旅館で名物の手打蕎麦を堪能し、露天風呂に入って散会した。

一方、午前九時から蓼科高原カントリークラブで行われたゴルフ大会には九名が参加し、昨年師走に心臓に人工弁を入れる手術を受けた渡邊義郎君が優勝し皆の祝福を受けた。

同期の桜のほとんど(昭和八年生)は来年百梅を迎える。

74回生同期会

IN 東京
成山正吉 (74回) 記

晩秋の気候もすがすがしい二〇〇一年一〇月二七日、赤坂プリンスホテルに三名の先生方をお招きして七十余名が集い、同期会が開催された。



全員での記念撮影の後、物故者に黙祷をささげ宴会に入った。会場内では在学中のスナップ写真の展示やスライドの映写も行った。

清陵卒業以来三〇年ぶりに会う仲間もいて、最初は懐かしさの中にもある種のぎこちなさも漂っていたが、宴の進行とともに、同じ時代を清水ヶ丘の木造校舎で共に過ごした仲間、歳月のプランクは消え、当時の思い出話、卒業以来歩んできた人生についての話など尽きない。せっかくの美味しいお料理も、話に夢中で、半分以上手つかずの状態だった。卒業以来の空白を埋めるにはあまりにも時間の経つのが速すぎた。校歌斉唱の後、一次会へと会場を移し、ここでもそれぞれの話に盛り上がり、先生方からも当時のと

つておきの話などをお聞きした。アルコールも良い感じに回って、みんなの顔は完全に清陵生の顔に戻っていた。時間となり、再会を約束し、握手で幕を閉じた。今更ながら「いい学校だったなあ!」と心から感じ、時間の経つのも忘れた良い一日だった。

第七回「女性の集い」

東京清陵会副会長
生越万理子 (66回) 記

二〇〇二年一月二六日に、七回目の集いが永田町の「せりりよう」にて開催されました。林会長、中澤副会長、金子事務局長にご臨席頂き、一八名の楽しい一刻を持つことができました。

第一期生から九六回生までの幅広い学年からの参加で、幹事は六二回生の長田宏子さんと庵上敏子さん。初めて出席された方もあり、長田さんの司会で自己紹介や近況報告。現在の厳しい企業

の状態、昨今の教育問題、嫁としての介護の問題等、和やかな中にも女性の抱える問題を語り合った交歓会でした。マリンバ奏者として活躍されている浜まゆみさん(96回)も出席されました。



演奏会や個展、講演会など、同窓生が活躍されている場に参加して行きたいと思えます。諏訪の土壌が培った「自反而縮」の精神が脈打っており、頼もしく、楽しい意義のある会でした。

春の東京清陵会ゴルフ会

東京清陵会ゴルフ同好会事務局
中澤 澄行 (58回) 記

第二回東京清陵会「ゴルフコンペ」が五月一六日(木)茨城県の阿見ゴルフクラブにて開催されました。今回の参加者は二三名と小人数でしたが、それもまたコミュニケーションを深める有意義なコンペになりました。

優勝者は森元功(59回)、準優勝は中澤澄行(58回)、最長老は小松昌平(43回)先輩でした。

次回一二月の大会は土曜日、日曜日も含めて計画したいと考えております。

●同窓連ゴルフ会

東京同窓連(長野県葛城高等学校東京同窓会支部連合会)と南信同窓連がそれぞれ、春秋年一回のゴルフ会を行っていることはご存じですか。この春両方のゴルフ会に私が参加してきました。女性の参加が多く大変カラフルで



楽しいゴルフ会でした。南信同窓連は私たちが次回の幹事です。今秋参加ご希望の方はご連絡願います。積極的な参加をおまわっています。

二〇〇一年度 東京清陵会定期総会報告

春山明哲 (68回)

東京清陵会は、恒例の「二〇月第二金曜日」の二〇〇一年一月一九日(金)、「アルカディア市ヶ谷」において、第三五回定期総会を開催し、林尚孝(52回)新会長以下一〇名の役員とともに、「海図なき航海の二世紀へ」(林会長就任挨拶) 漕ぎ出した。昭和四年諏中人学の三五回生から平成十年の一〇四回生まで、約七〇年間に及ぶ世代の二七〇名余の会員が参集した。

総会では、細川欣一氏(68回)の司会により開会が宣せられ、当番幹事である六八回生代表藤森照信氏の挨拶のあと、鎮魂曲が流れる中、参会者全員による黙祷が行われた。

続いて林尚孝会長の挨拶、諏訪からの来賓である同窓会長・宮坂久臣氏(49回)及び諏訪清陵高校校長・窪田孝美氏の挨拶のあと、林会長を議長として議事が進められた。議事では、金子充宏事務局長(65回)



から二〇〇〇年度事業及び収支決算報告、小松誠監査幹事(42回)からその監査報告、金子事務局長から二〇〇一年度事業計画及び収支予算案が提案され、いずれも満場拍手で了承された。

さらに、「東京清陵会人名録」の進行状況について、中澤澄行副会長(58回、制作委員長)から報告が行われた。また、今回功労者表彰が行われ、寺島敏郎前会長(50回)に林尚孝会長より感謝状と記念品が贈呈された。

さて特別企画としては、今年、『東京清陵会だより』第一二号の特集「寒水・伊藤長七の足跡を訪ねて」が縁となり、「伊藤長七・抒情の世界」小諸を去る辞」と題して、朗読とリユート演奏が行われた。朗読は劇団民藝の女優、伊藤博子さん。かの第一校歌「東に高さ」の作詞者、伊藤長七のお孫さんにあたる方である。リユート演奏は、古楽器奏者の立川叔男氏。おふたりの紹介、企画の趣旨について小林盛男氏(68回)が説明したのち、照明は薄明かりに落され、典雅なリユートの調に乗って、「若き日の伊藤長七」そして「小諸を去る辞」の朗読がはじまった。伊藤さんの透明感のある響きと格調に満ちた声会場に流れ、約二〇分の朗読と演奏は素晴らしい感動を参会者一同に与えた。

懇親会は「鏡割」から始まった。参加者はゲスト代表の伊藤博子さん、両角克夫氏(35回)、宮坂正昭氏(47回)

「真澄」二斗樽寄贈の宮坂醸造・副会長、矢崎和広氏(68回 茅野市長)、細田かおりさん(104回)の五名。諏訪からお見えになった山崎壮一氏(51回)による乾杯の音頭で宴がはじまった。旧交を暖め近況を語る談笑の輪は幾重にも広がって、瞬く間に時間は過ぎていった。

総会の最後を飾ったのは第一校歌「東に高さ」と第二校歌「ああ博浪の」である。伊藤博子さんと甥の伊藤岳君(長七から四代目にあたる)も交えて壇上にあがった我々六八回生そして参

二〇〇二年度 同窓会本部定期総会の報告

矢澤博 (69回)

平成一四年度の定期総会は、六九回生を当番幹事、七〇回生、七九回生をサブ幹事に、六月二十九日(土)午後一時より諏訪湖畔「ホテル紅や」を会場に開催された。

今年度は、参加すればきつと楽しいことがある「ときめき」と思いつく語りが出来る同窓会」を目指し、幹事学年、サブ幹事学年が一体となって、企画・立案・運営にあたった。その結果、実質総数三三〇を超える過去最高の参加者を迎え、盛大で楽しい同窓会総会となった。これも、ご参集いただいた方はもちろん、陰でご努力戴いた方、不運にも当日来場できなかった方を含め、多くの方々の努力の賜物といえる。

はじめに、宮坂久臣同窓会長より同窓会の現況及び各支部の状況報告、次に窪田孝美学長よりスーパースイエ

会者全員の歌声は、長七が作詞したあの明治時代へとその想いを乗せていったようにも感じられた。

総会は次期当番幹事代表の平林千春氏(69回)による力強い挨拶によって無事終了した。

なお、会場のロビーには伊藤博子さんのご好意により清水多嘉示作の伊藤長七のプロンズ像を、そして第一校歌から画題を取った大坪靖氏(57回)作の水墨画「諏訪湖全景」と「八ヶ岳遠望」を展示することができた。この場を借りて謝意を表したい。

ンスハイスクールの指定を受けた経過と今後について、また野球部の北信越野球大会での準優勝という輝かしい戦果等のお話をいただき、定期総会に入

った。武居浩明事務局長(56回)より(一)前年度会務・会計報告、(二)今年度事業計画・予算案の説明の後、(三)創立二一〇周年(平成一七年度)の記念事業として、記念講演会、同窓会名簿の刊行及び担当委員長(松下勲元学長59回)等について提案があり、討議、承認された。ついで同窓会役員改選が行われた。役員選考会議から総会に提案があり、会長は宮坂久臣(49回)、副会長として有賀裕(50回)、茅野實(52回)、林尚孝(52回)、淵上良子(56回)、監事・山岡正邦(48回)、竹村二司(50回)の方々が決定した。続いて、大久保智弘君(小説家)、八巻和彦君(哲学者)、花岡清二君

69回生 3人による トークショー
テーマ 団塊の世代と日本
作家 大久保智弘氏
早稲田大学文学部教授 和彦氏
セイコーエプソン 専務取締役 花岡清二氏

(企業家)の三人の六九回生による「団塊の世代と日本」と題するトークショーが行われた。小松郁俊君(名司)が、団塊の世代が経てきた時代背景をたくみに解説し、節目、節目での三者三様の生き方や考えたことなどを引き出しながら、清陵の三年間が、いかにその後の人生に影響を与えたのかを浮かび上がらせた。最後の「同窓会懇親会」も、広い会場にお集まりいただいた。宮坂同窓会長の挨拶、小菅重男元会長(45回)による乾杯の後はそれぞれ歓談し、旧交を温めた。サブ幹事70回生の音頭により「日本一長い校歌」の斉唱、小平祐先輩(42回)元東京清陵会長の発声による万歳三唱により、無事本年度の同窓会総会を終了した。かくも多くの方々のご出席により、盛大、かつ楽しく開催できたことを報告し、感謝にかえたい。ありがとうございました。

東京清陵会の現況

データベースから東京清陵会の現況をみると次のとおりである(二〇〇二・七・一〇現在)。

一、東京清陵会会員の定義

- (一) 首都圏(東京、神奈川、埼玉、千葉、群馬、栃木、茨城)在住の同窓生(ただし、退会申出者を除く)。
- (二) 転居して首都圏を離れたが支部会費を納入している同窓生。

二、会員現勢 総数三、七六八名

(住所不明者六七三名を除く)
(一) 都県別会員数

東京都一、八一〇名、神奈川県七六三名、千葉県四六八名、埼玉県四四

八名、茨城県八一名、群馬県二六名、栃木県三名、その他一六七名

この状態を改善するために、会費の値上げなどの対策をとらざるを得なかった。会員の皆様のご理解とご協力を切にお願いしたい。(会長 林尚孝)

三、会費納入状況(一九九七・四)

二〇〇二・三会計期

四、憂うべき財務状況

別表2に明らかなように、納入者・納入金額がともに四年間にわたって半減し続けていたが、昨年度は辛うじて増勢に転じた。別表3に示したように、九年間で会員数は約一〇%減少し、所在不明者は三倍強に増加している。財政状況の悪化にともない次期繰越金は、一千万円を割り込もうとしている。

別表3 会員数と次期繰越金の推移

年	会員数	不明者数(名)	次期繰り越金(円)
1994	4,227	207	16,039,236
1995	4,265	238	16,073,199
1996	4,179	267	15,962,791
1997	4,068	329	15,008,425
1998	3,944	437	16,330,130
1999	3,797	546	15,191,116
2000	3,832	485	13,660,668
2001	3,628	649	11,499,913
2002	3,768	672	10,266,836

別表1 年次別会員数と会費納入結果(7月10日現在)

回	現員	不明	計(費)	回	現員	不明	計(費)	回	現員	不明	計(費)
21	1	0	1(-)	47	71	2	73(49)	75	54	12	66(16)
22	1	0	1(-)	48	79	2	81(47)	76	47	12	59(15)
23	1	0	1(-)	49	113	2	115(73)	77	59	14	73(23)
24	1	1	2(-)	50	96	7	103(73)	78	58	25	83(14)
25	5	1	6(-)	51	109	5	114(79)	79	46	21	67(18)
26	4	1	5(-)	52	121	2	123(97)	80	29	22	51(10)
27	7	0	7(-)	55	32	0	32(23)	81	32	22	54(8)
28	10	2	12(-)	56	119	8	127(73)	82	29	25	54(10)
29	2	2	4(-)	57	122	4	126(87)	83	43	47	90(20)
30	7	2	9(-)	58	114	2	116(83)	84	31	25	56(11)
31	12	2	14(-)	59	109	6	115(67)	85	43	32	75(13)
32	11	4	15(-)	60	121	8	129(76)	86	33	19	52(11)
33	14	2	16(-)	61	109	7	116(68)	87	27	16	43(2)
34	16	1	17(-)	62	110	9	119(62)	88	22	29	51(7)
35	26	1	27(-)	63	118	10	128(82)	89	18	36	54(5)
36	21	4	25(-)	64	91	6	97(63)	90	10	29	39(1)
37	15	2	17(-)	65	89	4	93(52)	91	16	23	39(2)
38	28	0	28(-)	66	95	6	101(49)	92	31	22	53(5)
39	32	1	33(-)	67	106	10	116(49)	93	10	11	21(1)
40	28	0	28(-)	68	93	8	101(48)	94	8	6	14(0)
41	47	2	49(-)	69	112	8	120(53)	95	4	6	10(0)
42	48	3	51(42)	70	102	10	112(40)	96	11	8	19(1)
43	54	1	55(37)	71	77	12	89(20)	97	2	1	3(0)
44	55	1	56(42)	72	64	6	70(24)	98	7	1	8(0)
45	57	2	59(42)	73	70	6	76(25)	99	1	1	2(0)
46	73	3	76(56)	74	75	20	95(31)	100	4	0	4(1)
計 3,768 673 (1,928)											

注 1) 現員：東京清陵会に登録されている会員で、所在不明者を除く
 2) 不明：以前東京清陵会に所属して現在所在不明のもの
 3) ()内は前会計期(1997.4～2002.3)会費完納者及び前納者の人数、75歳以上(42回以前)の会員は会費免除
 4) 会費納入者数1,928名と今期納入者数の差は終身会費納入その他による
 5) 終身会費納入者総数1,221名(内39名死去、17名所在不明)

別表2 年度別会費納入額及び納入者

前々期納入額総計(1992.4～1997.3)		10,936,585円; 2,079名	
内 訳	1992年4月	～	小計 4,351,185円 (1,021名)
	1993年3月	～	2,090,400円 (353名)
	1994年4月	～	1,428,800円 (236名)
	1995年4月	～	1,855,600円 (289名)
	1996年4月	～	1,210,600円 (180名)
前期納入額総計(1997.4～2002.3)		7,499,200円; 1,371名	
内 訳	1997年4月	～	小計 3,577,200円 (734名)
	1998年3月	～	1,620,800円 (272名)
	1999年4月	～	862,800円 (129名)
	2000年4月	～	434,000円 (69名)
	2001年4月	～	1,004,400円 (167名)

- ### 二〇〇一年度会務報告
- 二〇〇一年
- 九・一三 第一回人名録制作委員会 中央印刷 八名出席
 - 九・二二 第一回在校生とOBとの交流「交流の方法について」 清陵高校応接室 OB二名、在校生八名、職員四名出席
 - 一〇・一九 第三五回定期総会 アルカディア市ヶ谷「富士の間」六八回生担当 出席者総数二六四名
 - 一一・一四 事務局会議 三菱信不動産販売会議室 八名出席
 - 一一・二六 第二回在校生とOBとの交流「交流の方法について」 清陵高校応接室 OB四名、在校生八名、職員二名出席
 - 一二・五 第三回人名録制作委員会 中央印刷 六名出席
 - 二〇〇二年
 - 一・一〇 第一回人名録制作委員会 中央印刷 八名出席
 - 一・一一 六九回生幹事団結成 平林千春事務所 五名出席
 - 一・二六 第七回「女性の集い」 せいりよう 一八名出席
 - 一・三〇 第一七回人名録制作委員会 中央印刷 九名出席
 - 二・一〇 第三回在校生とOBとの交流「校歌について」 清陵会館 OB一〇名、在校生二二名、職員四名
 - 二・二 東京同窓連 新年会
 - 日本教育会館九階「喜山」二名出席
 - 二・七 第一回六九回生進行会議

会費値上げと終身会員募集中止について(案)

会費 年会費を千円とし、三年を二期として徴収する。

終身会費 終身会員の新規募集を中止する。

ただし、これまでの終身会員は会費納入を要しない。

理由

①一人当たり経費が七百円前後かかっている上会費納入率が低く、六百円では運営できないこと。

②終身会員の受取利息が期待できないこと。

詳しくは同封別紙参照。

訃報

謹んで哀悼の意を表し、
ご冥福をお祈り申し上げます。(敬称略)

氏名	年次	逝去年月日
小澤 泉	(23回)	2000.12.26
村上 誠	(26回)	2001. 7.18
高木 幸次	(27回)	2001. 6. 5
林 治雄	(28回)	2001.10. 8
笠原 延元	(29回)	2002. 4.22
上条 重直	(30回)	1998.12.29
浅川 健公	(35回)	2000.11. 5
鳥居 成道	(35回)	2000.11. 3
金原 昌夫	(36回)	2002. 5. 6
小林 昭郎	(36回)	2001. 7.22
藤森 忠雄	(36回)	2001. 3.17
守屋 育衛	(36回)	2002. 7.16
大和 千春	(37回)	1999.11. .
木村 恒幸	(37回)	1994. 5.27
林 盛男	(37回)	2000. 2.19
牛山 正雄	(38回)	2001. 2.21
清水 原一	(39回)	2000. 9.27
小坂 敬直	(40回)	2002. 7. 9
田中 重治	(40回)	2002. 6.11
水野 武人	(40回)	2001. 4.16
堀内 秀一	(41回)	2001.11. 3
長田 啓	(42回)	2002. 3. 8
樋口 幸雄	(42回)	2000.10.15
平山 健夫	(42回)	2000. 9.21
藤西 敏興	(42回)	2001.11. 7
河野 聡夫	(43回)	2001. 7.21
笠原 公	(44回)	2001. 9.13
野口 侃	(44回)	1998.11.14
平澤 登	(44回)	2001. 2.12
小林 昭二	(46回)	2001. 4.11
矢崎 市朗	(48回)	2001. 3.30
伊藤 達郎	(49回)	1998.10.16
岡村 正己	(49回)	2001. 6. 4
御子柴 栄一	(49回)	2001. 7.17
中島 章弘	(50回)	2001. 9.12
宮下 尤材	(50回)	2001. 8.11
里見 一俊	(51回)	1999. 9.16
桜井 瑞穂	(52回)	2002. 2.20
佐久 剛一	(55回)	2002. 3. 3
吉澤 満雄	(55回)	2002. 4.29
山田 幸穂	(57回)	2001.12.18
飯田 米	(58回)	1996. 1.22
植松 稔	(61回)	2001. 3. 4
堀田 牧太郎	(69回)	2000.11. 9
林 昭英	(75回)	2001.11.24
安部 聡	(84回)	2001. 8.24

(事務局に連絡が入った方)

2001年度収支決算報告(案) 自2001年4月1日至2002年3月31日(単位円)

支出の部		収入の部	
科目	金額	科目	金額
総会費用	1,797,542	総会会費	2,016,000
会議費	139,692	会員年会費	1,004,400
諸会費	26,000	寄付金	83,000
通信費	994,555	受取利息	2,757
印刷費	317,179	前期繰越	11,499,913
事務雑費	318,162		
会報費	746,104		
次期繰越	10,266,836		
合計	14,606,070	合計	14,606,070

2002年度収支予算(案) 2002年4月1日至2003年3月31日(単位円)

支出の部		収入の部	
科目	金額	科目	金額
総会費用	1,800,000	総会会費	2,000,000
会議費	150,000	会員年会費	1,600,000
諸会費	30,000	寄付金	50,000
通信費	950,000	受取利息	5,000
印刷費	300,000	前期繰越	10,266,836
事務雑費	350,000		
会報費	750,000		
予備費	50,000		
次期繰越	9,541,836		
合計	13,921,836	合計	13,921,836

(注) 通信費の内 200,000円は総会会費から充当する

- 六・一 諏訪清陵高校評議員会
- 六・一 諏訪清陵会理事會
- 六・一 (財) 諏訪清陵会理事會
- 六・一 清陵高校応援室 三名出席
- 六・一 同窓会常任幹事會・幹事會・懇親會 清陵會館 四名出席
- 六・八 第二回事務局會議
- 六・一四 第四回六九回生進行會議
- 六・一四 神田シティホテル 五名出席
- 六・一四 神田シティホテル 二〇名出席
- 六・一五 南信同窓連定期總會及び懇親會 虎ノ門パストラル 三名出席
- 六・二九 本部定期總會、記念講演(六九回生三名によるトークショー)及び懇親會 三三〇名出席
- 七・六 諏訪清陵高校「在校生・同窓生交流會二〇〇二」 第五二回清陵祭行事の一環として企画、一七七分科會 OB七二名、在校生全員参加
- 七・一二 第五回六九回生進行會議
- 七・二〇 常任幹事會 南青山會館 二五名出席
- 七・三〇 東京同窓連正副會長引継會 日本教育會館 一名出席
- 二〇〇二年事業計画(案)
- 一、第三六回定期總會の開催 一〇月一八日(金) アルカディア市ヶ谷「富士の間」六九回生担当
- 二、『東京清陵会だより』一三〇号の発行
- 三、『東京清陵会人名録二〇〇一年版』

- せりりよう 一三二名出席
- 二・二六 第一九回人名録制作委員會 中央印刷 六名出席
- 三・七 第四回在校生とOBとの交流「伝統とその継承」 清陵高校応援室 OB四名、在校生七名、職員四名出席
- 三・二 第五四回清陵高校卒業式 清陵高校体育館 二名出席
- 三・一三 第一回會報編集委員會 ジョン・万次郎 一名出席
- 四・三 清陵高校入學式 清陵高校体育館 三名出席
- 四・九 二〇〇二年第一回事務局會議

- 小野包装 事務局六名、六九回生二名出席
- 四・一二 清陵高校新入生歓迎會 清陵高校体育館 一名出席
- 四・一二 第二回六九回生進行會議 神田シティホテル 二二名出席
- 五・八 第二回人名録制作委員會 中央印刷 九名出席
- 五・一〇 第三回六九回生進行會議 神田シティホテル 一九名出席
- 五・一六 第二回東京清陵会ゴルフ同好會コンペ 茨城県阿見ゴルフクラブ 一三名出席

- 六・二五 南信同窓連定期總會及び懇親會 虎ノ門パストラル 三名出席
- 六・二九 本部定期總會、記念講演(六九回生三名によるトークショー)及び懇親會 三三〇名出席
- 七・六 諏訪清陵高校「在校生・同窓生交流會二〇〇二」 第五二回清陵祭行事の一環として企画、一七七分科會 OB七二名、在校生全員参加
- 七・一二 第五回六九回生進行會議
- 七・二〇 常任幹事會 南青山會館 二五名出席
- 七・三〇 東京同窓連正副會長引継會 日本教育會館 一名出席

- 二〇〇二年事業計画(案)
- 一、第三六回定期總會の開催 一〇月一八日(金) アルカディア市ヶ谷「富士の間」六九回生担当
- 二、『東京清陵会だより』一三〇号の発行
- 三、『東京清陵会人名録二〇〇一年版』

- の販売促進
- 四、第八回女性の集いの開催
- 五、東京清陵会ゴルフ同好會、ゴルフ會の開催(春、秋)
- 六、常任幹事會、学年幹事會、事務局會議の開催
- 七、同窓會本部事業への協力
- OBと在校生との交流(清陵祭への参加)
- 八、郷里同窓會關係団体(東京同窓連、南信同窓連)への参加

東京清陵会
人名録
二〇〇一年版

東京清陵会會員約三、七五〇名
物故會員一、一〇〇名を掲載。
多くの會員から一筆コメントを
お寄せいただき、「読める人名録」
になっています。
東京清陵会はほぼ一〇年ごとに
人名録を発行してきました。今後
一〇年、同窓生の消息を伝える一
冊としてご利用いただけます。
申込方法 同封の郵便振替にて
ご送金ください。一週間ほどで
お手元に届きます。



2002年3月20日発行
B5版、444ページ 頒価 3000円